鹿沼詩友会誌（2005 年２月号）

第１３８回　作品寸評　　　　　　　　　　　　　　　　　　小林　守

1　　祈　願　　小太刀美恵子

前回の［おふくろの味］と同じく、亡き母がテーマです。「母からの自立」というテーマは、普遍的な人の深みがどんどん見えてくるテーマではないでしょうか。

「生まれて育った美しいこの町が好き！」を表現するとき、「美しい，好き」ですべてが消えて終わってしまいそうにおもいます。もっと辛抱して深みから違う表現を見つけ出してくれることを期待しています。

2　　秋のひととき　　小太刀美恵子

母からの自立の心象がこの詩になってきていると見ていいでしょうか。もっと言葉が熟成されてくるように時間をかけてください。詩的な結晶度がまだ出てきていません。

「秋風がピューピュー」というオノマトペ（擬態語、擬音語）はイメージがぴったりきませんがどうなのでしょうか。

3　　たがやす　　黒川フミ

「心田を耕す」という言葉や「耕して天に到る」という言葉があります。

テーマのほり下げがだいぶ進んでいるようです。もう一息、踏み込んで突き抜けてください。新川和江の詩集「土へのオード１３」を是非読んでみてください。

「心」という言葉を使わずに書いて　みたらもっとよくなるのでは、と思いました。

4　　ホームステイ　　黒川フミ

１~２連はいらないです。３連を「１０歳の孫は」とし、「熊のぬいぐるみをしのばせて行った　オーストラリアでのホームステイ」として１連でＯＫ．帰国の第１声を第３信として、最後からの２つの連を一つの連にして、月並みな言葉を超える工夫が欲しいところ。

5　　秋の夕暮れ　　岡嶋保之

題と３連とも冒頭に「秋の夕暮れ・・・穏やかな、たそがれの、空、風・・・」が置かれています。「真っ赤な・・堂々とした、大きな・・太陽」など、少し饒舌で詩を軽くしています。「やけにぼくの胸を淋しくさせる」ものは何だろう。其処を言葉で掬い上げて見せてください。散文詩としてさらに、彫り込んでみるといいのではと思いました。

6　「雪が積もった。」　～ガラスの君～　　武田裕也

素材はいいものと思います。無駄な形容詞が気になります。思い切りカットしてみたらいいと思います。題のところに「～ガラスの君～」は必要でしょうか。

雪の踊り子

雪が積もった
小さな公園を見ていた
この街にもガラスのきみがやってきて
雪の上で踊りだす
小さな足跡　自転車の車輪の跡
粉雪が消したあとに

きみはいま　何しているのか
きみはいま　何処にいるのか
遠くから来た粉雪一つ
ぼくの肌にピタリとあたり消えていく
すべては白い息
ぼくという無力

時計の針が止まっている
午前零時一分前のシンデレラ
始まりもなく　終わりもない
終わりもなければ　傷つくこともない
雪の上の
小さな踊り子　　　　　（　小林　編詩　）

7　よく見聞きしわかりそして忘れず　　伊藤賢治

前回の「予感」よりも、集中度がましています。でもまだ観念的で生硬な言葉で表現を済ましてしまっています。賢治を引用した「感応する精巧な発信機を磨いていく」ことに期待し、その発信機で熟成の年輪を描いて下さい。「２０歳が老人で５３歳が自主トレ」というところですが、「２０歳が老人であった」という逆光の中の心象風景を丁寧に描くことで、いまの自分の抱負や決意が滲み出てくるのではないでしょうか。

（童謡の部）

1　オノマトペ(擬音語、擬態語)の使い方

オノマトペは新しさと愉しさをもっともっと作り出せるはずです。目をつぶり心で見たり、教えられてきた既成の音感やことばをいったん閉じて遊び心、無心の感性で聞いてみること大切だと思います。野口雨情が好んだ「天與童心」という言葉がありますが、大人の私たちが何処までその童心に同化したのかということだと思います。

そうでないとどんなに　童の歌詞を装っても、陳腐な大人の歌になってしまうのだと思います。

2　リフレーン(繰り返し、反復語)の使い方

その歌の「詩の骨」が其処にあるのだと思います。したがって磨かれた新しい言葉や音色を出したいものです。日本人の呼吸法にあった歌であるので、古来から五七調、七五調に基本的にはなってしまうと思いますが、破調の場合はそのリズムをしっかりと固めて使うべきだと思います。

言葉の力

1　古今和歌集「仮名序」　紀貫之

力をも入れずして天地を動かし　目に見えぬ鬼神をもあはれと思わせ

男女の仲をも和らげ　猛き武士の心をも慰むるは　歌なり

2　言語動物としての人間　表三郎　（駿台予備校講師）

求愛行動に人間の言葉の起源があるからこそ、その愛も言葉とともに普遍化して、文化が生み出されたのであろう。普遍化するということは、もちろん人間がますます自由になるということである。

3　言葉に惑う時代の若さ　茂木健一郎　（脳科学者、ソニー研究所）

新しい言葉を生み出す原動力はなんだろうか。悲しみにかられた人が叫び声をあげるように、私たちの脳の中で、ある無明の契機がぎりぎりの縁まで達した時に、あふれ出て形になるのが言葉なのではないか。

4　心をつなぐ言霊を持った言葉　大庭みな子（作家）

ある歌人の日く。「歌の世界では、一番自分の言いたいことを言葉にしていけません。」自分の一番表現したいことは直接に表現はせず、別の言葉を用いて聞き手の想像力を働かせて、理解させるほうがはるかに効果があるということだろうか。詩歌の類は言葉と言葉の間にある空間、表現されていないものを大切にして、聞き手の心を働かせる魔術でもある。

5　言葉が息づく時　柳田邦男　（ノンフィクション作家）

その人なりに自分の内面を表現するものに心を傾注することができた人は、そのことによって生きるエネルギーを獲得することができる。